

創刊のご挨拶

関西大学臨床心理専門職大学院
心理臨床カウンセリングルーム室長

中 田 行 重

本学では、今年度2009年4月に臨床心理専門職大学院（心理学研究科心理臨床学専攻）が設置され、臨床心理高度専門職業人の養成を目指した教育が始まった。昨年度までは臨床心理士を目指す学生は、日本臨床心理士資格認定協会指定の第一種大学院である、社会学研究科社会心理学専攻臨床心理学専修へ入学してきていた。したがって、今年度は後者の大学院生の修士2回生と、前者の修士1回生が、～授業は別々であったが～、資格取得を目指す院生として同時に在籍していた。この2つの大学院課程には、本学の社会学部および文学部からの進学者、そして学外からの入学者が入り混じっている。つまり、本年度は、2つのカリキュラムと、様々な学生が同居するという、学生にとっても教員にとっても混沌とした状況を歩んできた。しかし、1年近くが経過し、ようやく落ち着きつつある。

そのカリキュラムの中で、心理臨床カウンセリングルームは院生の学内実習の現場の1つである（もう1つは心理相談室）。講義や演習における理論学習やロールプレイを基礎として、ここでは心理臨床の実践を、担当の教員の指導を受けながら、心理的な問題でお困りの地域の方に対して実際のケースワークをさせていただく。院生は研修生としてカルテ管理や守秘義務という実務上の心得を学ぶことから始まり、インテーク面接の陪席、電話受付、カルテ記載の仕方を学び、ついには来談されるクライアントとお会いすることになる。そして、クライアントへの最も効果的な心理的援助を行うべく、教員から指導を受ける。

最近の心理的援助のテーマは、筆者が院生として指導を受けていた頃とは異なり、発達系の不適応や気分がすぐれないことによる不適応（抑うつ感）が増えている印象である。また、既に病院や他の相談機関にかかっているながら、本カウンセリングルームでの相談を希望されたりする方も増えている。そうした問題に対して、カウンセリングルームとしては古いものから新しいものまで有効と思われる方法を積極的に用いて来談された方のニーズにお応えするよう、キャリアをもった中堅の相談員が中心になって面接を行っている。そこに院生が担当可能なものについては、教員の指導を受けながら心理面接を行っている。

リーマン・ショックに始まる世界的な経済危機を持ち出すまでもなく、この社会（日本だけの話ではないが）を生きるということは、確実に良くない方向に向かっていると分かっているながら、なかなか手も足も出ないという状況を生きるということである。誰もが不安と常に向き合わせられるし、無力感に覆われる。その社会状況がベースにありながら、親子や職場、学校の間関係や、人生において処理すべき問題の複雑さ、職務の過重が加わる。本カウンセリングルームは院生の実習の場ではあるものの、それよりも、地域でそのような問題を抱えておられる方へのサービス機関としての機能が第一義である。この難しい時代において心理臨床という営為によってどれほどのことが出来るのかと考えると、身の引き締まる思いであるが、カウンセリングルームのスタッフはそれに対する挑戦の姿勢をもって、地域の人々への援助の質を向上すべく常に努めていきたいと考えている。

今回創刊することになった本紀要もその趣旨に沿い、研究のための研究ではなく、実践の質を向上させるための研究成果を公表するものでありたいと考えている。